

福岡大学 正員 大和竹史

〃 坂田義明

〃 学員・中村光郎

## I まえがき

人工軽量骨材コンクリートの乾燥における単位セメント量、単位水量およびセメントの種類の影響を検討し、さらに既報の普通骨材コンクリートの乾燥収縮量との比較を試みたのでその結果を報告する。

## II 実験方法

使用したセメントは普通ポルトランドセメント(比重:3.16)、早強ポルトランドセメント(比重:3.13)、高炉セメントB種(比重:3.03)、フライアッシュセメントB種(比重:2.96)の4種類であり、細骨材は海砂(未償還度:250、吸水量:18.3%、FM:2.30)、粗骨材は人工軽量骨材(造粒型、最大寸法:15mm、比重:1.55、吸水量:6.10%、FM:6.29)を使用した。コンクリートの配合および強度は表-1、2に示す。乾燥収縮用供試体は75×10×40cmの角柱供試体で、打設後2日目に脱型し測定を開始した。

ひずみ測定はホイドモアゲーリング(測定長:25cm)を使用して行なった。

## III 実験結果および考察

実験結果を図-1~4に示す。

1) 単位水量の影響を検討するため目標スラブア3.10.20cmのコンクリートの乾燥収縮量をセメントの種類別に比較してみると、普通ポルトランドセメントでは乾燥期間約60日まではN-10、N-3、N-20の順に収縮が大きいが、それ以降はN-10、N-20、N-3の順となっている。早強ポルトランドセメントではS-20、S-10、S-3の順である。フライアッシュセメントでは約110日まではF-10、F-20、F-3の順であるが、その後直線的に高炉セメントでは約30日まではK-20、K-10、K-3の順であり、それ以降はK-10、K-20、K-3の順である。

以上より、W=約160kg(スランプ3cm)のコンクリートの収縮はあらかじめW=約170~180kg(スランプ10.20cm)のコンクリートの収縮よりも大きくなっているが、W=170kg程度以上になると単位水量の増加に伴い必ずしも収縮が大きくなるとは言えないようである。

2) 普通ポルトランドセメントを使用したコンクリートについて単位セメント量の影響を検討すると、C=450kgは乾燥期間約50日までの測定であるけれども、N-3ではC=450、300、200kgの順に収縮が大きくなっている。N-10、N-20でも同様にC=450、300、200kgの順に収縮が大きくなっている。3配合間の単位水量の差は約2~7kgと非常に少なく、その影響は無視できるので単位セメント量が大きになれば収縮も大きくなると言えよう。

3) セメントの種類の影響について検討すると、スランプ3cmではK-3の収縮が小さいが、他の3配合の収縮はだいたい同じ値を示して、幾分大くなっている。スランプ10cmではN-10の収縮が大きいが、他の3配合の収縮は小さくなっている。

表-1 コンクリートの配合

セメント	W/C	S/a (%)	単位量 (kg/m³)				slump	Air (%)	
			C	W	S	G			
普通 (N)	3	54	45	300	162	825	603	0.75	4.8 3.1
	10	58	"	"	174	811	593	"	11.5 3.0
	20	63	"	"	189	793	580	"	25.0 2.8
早強 (S)	3	54	45	300	162	824	602	0.75	3.5 3.5
	10	58	"	"	174	810	592	"	11.7 4.2
	20	62	"	"	186	796	582	"	22.0 4.4
フライ (F)	3	53	45	300	159	824	602	0.75	5.6 3.4
	10	56	"	"	171	810	592	"	14.2 3.4
	20	59	"	"	183	796	582	"	20.9 4.1
高炉 (K)	3	53	45	300	159	820	599	0.75	3.6 2.2
	10	57	"	"	168	809	592	"	11.8 2.3
	20	61	"	"	177	799	584	"	20.6 2.4

表-2 コンクリートの強度

セメント	水セメント比	正味強度 (kg/cm²)	引張強度 (kg/cm²)		静的強度係数 (kg/cm²)
			3	7	
N	3	294	20.5	1.74	
	7	391	22.0	2.35	
	10	278	24.6	1.52	
	20	376	24.6	2.47	
S	7	211	17.2	1.42	
	20	303	22.9	2.50	
	3	363	25.3	2.53	
	28	424	30.5	2.34	
F	10	345	16.8	2.29	
	7	345	26.5	2.45	
	20	279	22.3	2.22	
	28	339	26.9	2.45	
K	3	268	19.9	3.13	
	28	397	26.9	2.20	
	10	254	18.3	1.92	
	7	373	20.3	2.41	
	20	239	18.1	2.52	
	28	358	22.4	2.32	
	3	300	22.5	1.87	
	28	441	30.9	2.40	
	10	266	18.6	1.78	
	7	406	27.3	2.34	
	20	232	20.8	1.71	
	28	392	30.1	2.20	

スランプ20cmではS-20,N-20,F-20,K-20の順に収縮は大となっている。

乾燥収縮におけるセメントの種類の影響は普通コンクリートの場合と同様に人工軽量骨材コンクリートの場合もその影響はあまりみられない。

4) 軽量コンクリートの乾燥収縮と普通コンクリートの乾燥収縮について比較すると、(表-3参照)終局収縮値の $\frac{1}{3}$ になるまでの期間は軽量コンクリートでは約20日前後、普通コンクリートでは約10日前後となり、終局収縮値の $\frac{1}{3}$ になるまでの期間は普通コンクリートの方がより短い。また本実験においては終局収縮値は軽量コンクリートは普通コンクリートの約1.2～2.0倍となっている。

人工軽量骨材は吸水量が大であるから、骨材内部の水分がセメントペースト部に補給されるためセメントゲルの収縮が妨げられ、乾燥の初期において軽量コンクリートの収縮が普通コンクリートの収縮より少ないと考えられる。<sup>2)</sup>

また軽量コンクリートの終局収縮値がより大となるのは人工軽量骨材は普通骨材よりマング率が小であるから、乾燥期間が長期になるとと考えられる。<sup>3)</sup>

## II. あとがき

コンクリートの単位水量の大きいほど、富配合であるほど、収縮は大となっている。したがってセメント量を減少させるためには、配合が適切であること、締固め方法が適切であることなどが肝要と考えられる。

単位セメント量については、他にC=200kg, C=450kgの乾燥収縮の実験も行なった。これらについては講演の際に述べる。

最後に、本実験にあたり多大の労をわざらわした永浜敏裕、松尾惠一両君に謝意を表する。

## 参考文献

### 1). 4). 猪股俊司：“アレストレストコンクリートの設計および

施工”, P.37, P.36, 技報堂

- 2). 阪田亮次、他：“軽量コンクリートの乾燥収縮と逸散水量との関係” 第26回セメント技術大会講演要旨
- 3). 村田三郎：“人工軽量骨材コンクリート” P.44, コンクリートパンフレット, 第79号, セメント協会
- 5). 増山隆一：“各種セメントを用いたコンクリートの乾燥収縮および乾燥による強度変化” ’70. VOL. 8, No. 6 コンクリートジャーナル
- 6). 大和、坂田、他：“各種コンクリートの乾燥収縮量について” V-16, P.233, 研究発表会論文集, 土木学会西部大会,

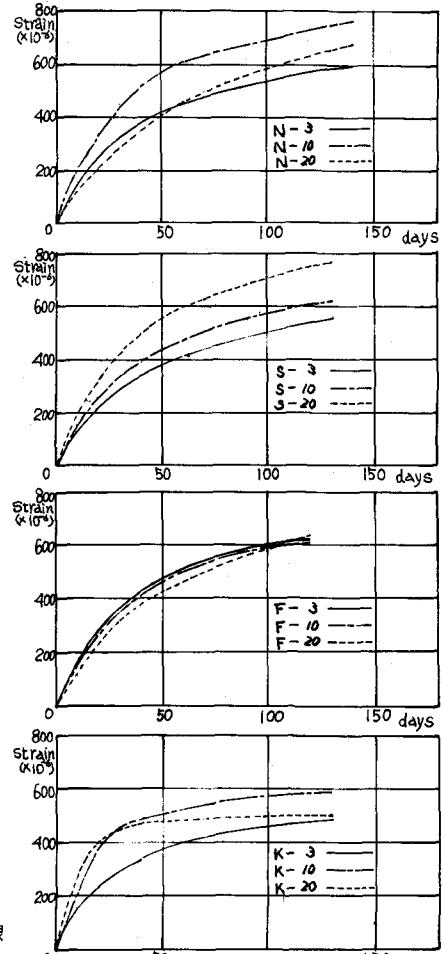


表-3 終局収縮値の推定値

項目 セメント kg/m³	軽量骨材コンクリート		普通骨材コンクリート	
	終局収縮値 $S_{\text{d}} (\times 10^5)$	終局収縮値 $S_{\text{d}} (\times 10^5)$ となる期間 $t (\text{日})$	終局収縮値 $S_{\text{d}} (\times 10^5)$	終局収縮値 $S_{\text{d}} (\times 10^5)$ となる期間 $t (\text{日})$
N	3 769	21	500	10
	10 909	16	556	16
	20 1000	38	526	13
S	3 769	24	526	13
	10 833	23	435	11
	20 1000	21	556	9
F	3 833	25	435	6
	10 833	12	400	7
	20 1000	11	526	9
K	3 588	11	500	12
	10 667	14	667	12
	20 526	14	1000	19